

第6号の特集 健常者から見た障害者観

さみしさ ゆきやなぎ れい
さみしさという言葉は
けんかして 離れ離れに なってしまった
やさしさという
四つの文字を 借りて作られた
だから
さみしい時にやさしさを求めるのは
さみしさ が 仲直りして
やさしさ に 戻りたいためだ

健常者から見た 障害者観 団体職員

障害者って 何故 施設にいるの？
何故 僕のアパートの隣のお部屋にいないの？
障害児って 何故 町の保育所に行けないの？
何故 お家の前に学校があるのに行けないの？
障害者って 何故 愛されなければ行けないの？
何故 「権利」を主張したらいけないの？
何故 かわいそうなの？
同じ人間でしょ。
今、午後9時。
同じ9月の空気の中。
同じ光を感じ
同じ風が吹き抜けているのに

団体職員 僕は、何故、障害児（者）が不当に差別された生活をしなければいけないのか、と不思議だし、そういうことに激しい怒りを覚えます。しかし、時として、差別がされている側の障害者の人たちがその差別を甘く心に受けていて疑問にさえ思っていない姿に出合う時、とても妙な気持ちになります。

健常者は、障害者が障害者らしい生活をしていると、とても安心します。健常者は、健

常者から見た理想的な、つまり、自分たちの都合のいい障害者像をつくり、障害者におしつけています。

障害者が、その困難に負けずに何かに頑張っている姿は、健常者から見れば涙が出るくらいに感動的で美しいから、心にもない優しい言葉をかけてくる…。ああ、なんてかわいそうな異空間の人たち…。でも健常者好みの障害者にはけっしてならないで欲しいと思います。

健常者から見た障害者観 教員

世間では、「健常者」「障害者」と言っているけれど、この××の悪い日本語を聞くたびに消化不良をおこしたような不快感を覚える。

「健常」「障害」をとりたてて言わねばならぬ社会が、けっして健常であるとは思えない。僕のかつての教え子たちが、その障害の故に、世間に出てゆくことができず、働く場も家庭もなく、恋愛もできず、新しい家庭ももてずにいることを思う時、彼等にとって、体の「障害」が障害なのではなく、世間に出ていけぬことが最も大きな「障害」だと思うほかない。体に障害があっても、新しい友だちをつくり、不特定の間人間関係を持つことができさえすれば、世間で言う「障害者」だと、とりたてて自分のことを言わねばならぬこともない。

「健常者」と呼ばれている人は、自分のことを「健常者」と思っているのだろうか？あるいは「健常者」と呼ばれたいのだろうか？体の障害の故に、世間に出られないという「障害」、そんな現実の上に、さらにまた一つ「障害」をつけ加えられているような気がして、私は「健常者」「障害者」の呼称を常々厭しく思っている。この世間に障害が存在していることは、事実であるが、少しでもその「障害」をなくしていくことが、「健常者」にとって最も大切なことであろう。

何故なら人はだれでも「障害者」なのであり、「障害」に無縁な人はひとりもいないからである。

…今 思うこと… 在宅障害者

同じ障害を持つ仲間から、よく一般の健常者の人たちは、障害者に対して理解がない。いつも知らんぷりをしている、とえう声を聞くことがあります。僕はそれだけでは片づけられないのではないかと思います。

すべての健常者の方が、障害者のことをいつも心の片隅に抱いていて、急に出会ってもとまどうことなく、その場に適した対応が十分であったならば、障害者問題は、そんなに深刻化しなくてもすんだのかもわかりません。

でも、こんな問題の責任を健常者だけに押しつけてもよいのでしょうか？僕は、その一

部の責任は、障害者側にもあると思います。

健常者は、障害者に対して理解がない、言っていないながら、その一方で障害者も健常者に対して、つい批判的になったり、理解してもらおうことがあたり前だと、意識しがちで、非友好的な点もないとは言えません。体の不自由さが、どんなに不便で都合の悪い事かを、経験のない人たちをただつかまえて理解を求めたところで、何の解決にもなりません。

要は、健常者の歩みよりと障害者自身が積極的に、彼等の中に飛び込んでいって、スキップを持ちながら、友情を深めていくことが大切だと思います。それによって始めて、体の不自由さが理解され、障害者との付き合い方が、少しずつ解ってもらえるのではないのでしょうか？

君は世の中のことをあまりにも、安易に考えすぎていると叱られるかもしれませんが、健常者が障害者を、ただ差別しているとは、どうい思えません。どちらかと言えば、障害者と接する機会が少ないため、どう対処しいていいかわからず行動に移すきっかけがつかめないまま、消極的になっている面もあるとえうことを、未熟な音楽活動を通して、僕なりに感じています。障害者問題が、解決していくには、障害者が積極的に健常者につきあっていけるかどうか大きなポイントになるのではないのでしょうか？

「健常者・障害者の交流について思うこと」 編集責任者

第2次世界大戦から40年を経て、もはや戦後という言い方さえ風化してしまいそうに思える昨今、全国各地には、経済的繁栄のもとに沢山の施設や養護学校ができた。

そんな中で、最近、施設の地域への溶け込み、障害者と健常者の交流について多くの意見が出され、色んなことがなされている。

施設や養護学校には、個々の能力に見合った対応ができるというメリットと、逆に社会と隔離されているというデメリットがあり、又、健常者と一緒に学校生活を行った場合、先の逆のメリット、デメリットがある訳で、今後、よく検討されていく事であると思う。

一つ注意しなければならないのは、社会という場合、過疎地、障害者、特定の施設、老人、子供、等人間にかかわる事柄すべてを含む訳で、それらトータルな視野で見えていかなくてはならない。現在は、未来に向かって進歩向上の途上である故に、社会に対し排他的、批判的にならず共に、××に対する共通認識を形成していかなければならないと思う。

編集局より

「……観」と言う眼に見えない、見方、とらえ方それぞれの立場で書いてもらいました。100人いれば100人の個性がある訳で、障害者、健常者とひとまとめにとらえるものではないと思いますが、共存していく上で、大切なことは、まず自分の持っている既成概念を破ること。そのためには、個々の立場で接するキッカケを積極的につくること。そこからまた新たな見方も生まれるのではないかと思います。原稿をいただいた方々に厚くお礼を申し上げます。次回のテーマは「障害者にとって結婚・恋愛とは」を募集します。

－催物紹介－

5号の「本の紹介コーナー」で紹介しました「風の旅」の著者星野富弘さんの「花の詩画展」が金沢で行われます。

中学校のクラブ活動中の突然の事故で、首から下の自由を奪われた彼が口に筆をくわえて、必死につづった絵や詩に感動したお母さんたちが集まって準備を進めています。

花の詩画展

期 日：4月3日（木）～8日（火）

場 所：大和デパート8階

問い合わせ先：紅茶の時間 「星野富弘詩画展開く会」

(0762)23-8625(PM5:30～)

'86つくしのコンサート 詩募集中!!

『あなたの心にノックしてみませんか?』をテーマに今年も「'86つくしのコンサート」が9月23日（秋分の日）に行われますが、コンサートで発表する詩を障害者の方々から広く募集しています。

応募規定は下記のとおり。

★募集期間：昭和61年2月1日～3月31日

★一人で応募できる点数は5点以内で未発表のもの

★テーマ：あなたの心にノックしてみませんか？

生活の中で感じた事を詩にまとめて聞かせてください。

★提出先：〒930-91 富山郵便局私書箱114号

'86つくしコンサート実行委員会迄

☎0764-91-3284

但し、日・火・金曜日 18:00～21:00

わたぼうし文芸コーナー

—私だって— 障害者施設利用者

結婚っていったいなんだろう
20歳を過ぎた娘には誰もが
年頃の娘
年頃の娘
年頃の娘だから……と
誰もが
口癖のように行っている
いくら何もできなく親の
助けをかりても
20歳を過ぎれば
年頃の娘だから……と言われる
障害者の20歳を過ぎた娘には
誰も
年頃の娘……
年頃の娘だから……と
誰も言ってくれない
いくら背伸びして頑張ってみても
たとえ目の前にいても
誰も言ってくれない
年頃の娘だから……と

短歌3編 地域住民・障害者

泡×を 次々波がわき起こり
次々消えて この世を示す
田をおこす 農夫の後に十数羽
白鷺群れて夕映えに染む
たやすく 他人をそしり言聞けど
鎮める言葉の仲々聞けず

エッセイ 地域住民・障害者

市の時を知らせる午後6時の音楽が、流れているのが、窓越しから聞こえてきます。みんなが家路にそそくさと、足を速める想像させる夕暮れ

自由投稿コーナー

―― 一番ほしいもの（愛） ―― 障害者支援施設・利用者

現在一番欲しい物は、好きな人の真心と愛です。ちょっと欲張りですが、今これが一番欲しいと思っています。他人はお金があれば、なんとかなるだろうと言っていますが、僕はそうは思いません。だって、お金は使ってしまったら、それっきりですが、愛は使うほどに増えてくるものだと僕は思います。

今、僕にはいろんな親友がいますが、一人とても厳しくて、温かい人がいます。その人は初めて出会った時は「つまらない人だなあー」と思いました。でも何回かつきあっていくうちに、話を聞いてくれたり、困った時は助けてもらったりしています。でも、ふと気がついたとき、僕はその人に頼りすぎていたので、その人はだんだん厳しくなり、見捨てるようになっていました。

ある夜、その人に強がりを書いてしまったのです。自分でも何故、あんな強がりを書いてしまったのか、今だにわかりません。きっと寂しかったのだと思っています。次の朝、その人に許してもらいましたが、その人は僕に「わがままで、自分勝手なやつ」と言われました。今から考えますと、とても反省させられます。

でも、僕はこれから大人になっていくのだから、そんなことを思っている、現実はそのないうまくいかないもの。僕は僕なりに大人になるように努力していきたいと思っています。そして、いろんな人に愛をあげたり、もらったりできる人間になりたいと思っています。今日この頃です。

「だって仕方ないもん」について 障害者支援施設・利用者

始めに断っておきますけれど、好き勝手のことを書きますから、異論のある方は、どうか係まで……。

最近、多いように思うのですが「運命だから」とか「仕方がないから」とかで済まし過ぎておりませんか？それは確かに運命ってあるでしょう。

前日、金沢で起こったパラコート殺人事件にしてもそうですが（僕の交通事故もそうでしたが…）情報網が発達し過ぎて、慣れ過ぎて無感覚になっているのではないのでしょうか？

僕ら障害者も一人の人間です。「仕方ない」からでは、何も生まれないのではないのでしょうか？たとえば、家族に障害者ができたとします。その時「仕方ない」で済ませていませんか？「運命だから」で済ませていませんか？交通事故のニュースにしても「気の毒に」とか「可愛想に」の言葉（言葉が出たらまだマシですが）ではないのでしょうか？

それに、皆さん無関心過ぎませんか？皆んなで無関心、無気力、無責任の三無主義を打ち砕きましょう。

●第5号で、「カンパ」では理解が得られない、の匿名者の投稿について、新たに原稿をいただきましたので掲載します。

……カンパについて…… 地域住民・障害者

この批評は障害者（重度）の実態を理解していない。5号の文芸コーナー「差別」にあるように障害の重い人たちの多くは在宅や施設に隔離され、家族や職員、そして一部のボランティアの人たちとしか、ふれあう機会はない。私たち「かめの子」はどんなに重い障害を持つ人たちでも、一般の人たちの理解と協力があれば自分の意志で生活ができると考えています。その一つとして街頭カンパや様々な運動を行っています。

今までの運動とは、行政や特定の団体に要望や改善を求める事や、それと係わる事が運動としている人たちこそ現状を肯定しているのではないか、それらは単に施設や制度の改善を促したに過ぎず、社会にある偏見や差別の解消にはならない。確かにカンパという行為は一時的には憐れみや蔑みの対象になるかもしれない。しかし、そのようなとらえ方にこそ障害者を可哀想なモノ、何もできない人として現状をとらえ、障害者の一つの問題提起活動として理解することなく、世間の中にある差別意識に慣らされ、流されている。

また、労働とは何か？を定義することなく、単に「障害者も働け」とするのは、社会の補完労働力として位置づけられ、その中で能力主義により障害者の中にも相互に差別意識を植えていている現状を助長するにすぎない。「かめの子は恵まれている、健常者にはカンパしてくれない」云々についても高所的な意見で障害者を憐れな眼でしかとらえていない、その運動を理解していない。

「かめの子」は障害者問題の門だと、私たちは考えています。そこには様々な主義、主張の人が集まり、その中で共通の問題意識の人たちがさらなる運動を展開する場です。それぞれの障害者、健常者が自らの意志によって様々な活動や運動を行う、それが私たち「かめの子の集い」です。障害者問題を話し、議論し、障害者や社会の中にある差別意識を問題にし、何故それらが生まれ、どうすれば解消するか、それぞれの立場で思考し活動する。それらが地域に根づいた本当の運動だと私たちは考えています。

事務局より

このコーナーは、何でも言いたい事、考えている事を掲載するコーナーです。字数は800字まで、原稿はお返ししません。ご了承下さい。新聞に対するご意見、ご批判でも結構です。お気軽に投稿をしてください。お待ちしております。

一本の紹介

共貧共存の思想

「生きる思想の表現としてのボランティア論」

播磨 康夫著 JABA出版部 定価1,000円

わたぼうしコンサートの創始者でもある。若きジャーナリストが、運動者としての経験をもとに、市民生活の思想やボランティア活動の原点を探る。

地球市民として！貧乏人の哲学！<殺すな>という意味！ともに生きる意味！

現代におけるボランティアリズム！遊びの中の市民主義！人間として！他。

大河の一滴

読売新聞社 定価980円 大森れい著

読売「女性ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞受賞作品

人間というものは、悠々と流れる大河の水の一滴のようなもの。その一滴は後にも、前にもこの私だけで、何万年さかのぼっても私はいず、何万年たっても、再び生まれてこない。しかし、なお、その私は依然として大河の一滴にすぎない……。 (本文より)

脳性小児マヒの2級障害者である息子と義母との上に流れた20年の歳月を描いた作品。人は不孝が落ちかかってくるが、何とか耐えてそれをやり通す。一難去ってほっとすると、またある日、突然思いがけない波が頭からかぶる。

だがやがて波は引くーーー人生の普遍性がここにはあるというもの。

編集後記

最近、久しぶりに高校生と話をしましたが大人と比べて知識、人生経験はなくとも、柔軟な思考、豊かな感受性そして何よりも純粋な眼を持っているとつくづく思いました。年齢、性別、郵便番号、ツベルクリン反応？の別なく、共に力を合わせて、豊かな社会を作りたいものです。

第5号で投稿原稿の掲載について、不手際がありご迷惑をおかけしたことを、お詫び申し上げます。

編集局では、編集を手伝ってくださる方、および ご意見、ご感想、PR等、広く募集しています。当新聞の幅広い活用を希望します。